

22 (桃札⑭) 吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を 嵐といふらむ

文屋康秀

意味: 吹くと立ちまち秋の草木はしおれてしまうので、なるほどこの山風の事を「あらし」というのももっともだ。

1 あらしといふらむ むべやまかぜを しをるれば あきのくさきの ふくからに	2 あ む し あ ふ	3 あらしといふらむ むべやまかぜを しをるれば あきのくさきの ふくからに この歌を詠んで、どんな天気を想像しますか。
読みます。	読みます。	この歌を詠んで、どんな天気を想像しますか。それが分かる言葉も探さない。→嵐
4 あらしといふらむ むべやまかぜを しをるれば あきのくさきの ふくからに	5 あらしといふらむ むべやまかぜを しをるれば あきのくさきの ふくからに あらしとありますが、雨は降っているでしょうか。	6 あらしといふらむ むべやまかぜを しをるれば あきのくさきの ふくからに どんな場所で歌われているか。それが分かる言葉を探さない。
「あらし」という言葉から、穏やかな天気ではないことはわかりますね。	「あらし」とあります。この時、雨は降っているでしょうか。この時、雨は降っていないんですね。この時代、「あらし」とは、雨を伴わない強い風のことを指します。」	どんな場所でこの歌は歌われていますか。それが分かる言葉を探さない。→山 山の中で歌われたのですね。
7 あらしといふらむ むべやまかぜを しをるれば あきのくさきの ふくからに 赤線を漢字に直して書き直さない。	8 嵐といふらむ むべ山風を しをるれば 秋の草木の 吹くからに 赤線を漢字に直して書き直さない。	9 嵐といふらむ むべ山風を しをるれば 秋の草木の 吹くからに 赤線を漢字に直して書き直さない。
この歌を、漢字を交えて書き直します。赤線を漢字にしない。	こうなりますね。この中に、ちょっとした言葉遊びがあります。漢字に直して何か気づきませんでしたか。(山風をくっけると嵐になる。)	「山風」を1つの漢字として書くと、「嵐」となります。歌の中で2つの漢字をくっつけて別の漢字を作る遊び心がこの歌にあったのですね。

10  文屋康秀	11 ゆきふれば きことにはなぞ さきにける いづれを と わきておらまし	12 雪ふれば 木毎に花ぞ 咲きにける いづれを と わきて折らまし
作者の文屋康秀は、山中で秋の草木が激しく吹き散らされているのを見て、「なるほど、はげしい山風のことを嵐と表すのも納得するなあ」と、考えてできた歌なのですね。	こんな工夫をこらした歌はほかにもあります。 この歌、口の中は何でしょうか。	ヒントです。漢字に直せるところを漢字にしました。
13 雪ふれば 木毎に花ぞ 咲きにける いづれを と わきて折らまし	14 雪ふれば 木毎に花ぞ 咲きにける いづれを梅と わきて折らまし	15
「木毎」に注目します。これから生まれた漢字はなにでしょうか。	「梅」が入ります。これも、言葉遊びの一つですね。	
16	17	18